様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ９ 月 １０ 日現在

機関番号：３２８２２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０４０４３

研究課題名（和文）終末期ケアにかかわる動物看護師のコミュニケーションと感情労働

研究課題名（英文）The communication and emotional labor of veterinary technicians dealing with the care of terminally ill pet animals

研究代表者
新島　典子（NIIJIMA, Noriko）

ヤマザキ動物看護大学・動物看護学部・教授

研究者番号：７０４２２３５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：動物看護師(Veterinary Technician, 以下VT)は、数年後の国家試験実施が決定した重要な職種でありながら、離職率が高いことが憂慮されてきた。
　そこで本研究では、飼い主と獣医師とを媒介するVTに対し、離職に繋がりうる感情労働の実態を調査した。人もペットも共に高齢化する現代日本社会において、増加する終末期のペットケアの実態やVTのケア観、ケアの実施に際し飼い主とのあいだに生じる諸問題の把握により、飼い主と獣医師とを媒介するVTの感情労働のあり方を示した。その際には、終末期ケアの場におけるVTの死生観や動物観、勤務経験の影響や、卒前・卒後教育のあり方など対処法も含め検討を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
データへのアクセス困難性から従来不可能だった、全国の幅広い年齢層のVTへの、調査票や半構造化面接、参与観察等による調査を行った結果、終末期に要介護状態になるペットの自宅介護を一人で抱え込み地域で孤立しがちな飼い主の苦悩や、それに対峙するVTの感情労働の現状、死生観の知識や共感、傾聴、想像力等コミュニケーションスキルの必要性が顕在化した。
　経験豊富なVTがペットケア支援体制を構築できれば、終末期ペットの在宅ケアを行う飼い主も、ペットを介在させて地域と繋がりやすくなる。飼い主の社会的孤立度を低減させ、人間の福祉制度を補完し、広く国民の介護・死別体験の苦悩緩和に資することの出来る可能性が示された。

研究成果の概要（英文）：Veterinary Technicians or VT’s, whose work liaises between veterinarians and animal owners, is quite an important profession, which will be nationally certified within a few years. However, the percentage of early resignations of VT’s is increasing. So, in this study, we have researched the current situation of VT’s regarding their emotional labor, which often causes them to decide to take quite early retirement from their profession. In Japan’s aging society of both people and companion animals, we researched the situation of the care of terminally ill pet animals and several related problematic areas, arising between VT’s and people. In so doing, we discussed the best educational programs for both students at colleges and the graduate VT’s.

研究分野：社会学、死生学、動物人間関係学

キーワード：ペットロス　終末期ケア　死生観　看取り　介護　高齢　安楽死　教育

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)　ペット飼育への関心の高まりとペットの高齢化によって、昨今ではペットの終末期ケアが必要な場合も増えている。ところが、ペットの終末期ケアの基準を定める法律は無く、また死別体験の機会が少ない現代社会では、ペットとの死別やケアに関する決断は、特に高齢飼い主にも獣医療従事者にも大きな精神的困難を伴う。

(2)　安楽死を選択した飼い主が深刻なペットロスに陥る事例があるが、飼い主のペットロスの悪化や回復の遅れの最大要因として、獣医師や VT による心のケア不足が挙げられる。

(3)　日本でペットの終末期ケアに関する獣医療従事者の意識や困難性を調査・検証する研究は乏しい。だが、社会的孤立度が高い傾向にある日本の飼い主、中でも特に高齢飼い主は、ペットとの濃厚な関係性を築きがちであり、死別体験の苦悩を緩和するケアの実践の検討が喫緊の課題である。

２．研究の目的

(1) 動物病院の最前線で飼い主に対応する動物看護師（Veterinary Technician, 以下 VT）を対象に、①ペットの終末期ケアの実態と VT のケア観、②ケア方針の決断・実施に際して増す高齢飼い主との間に生じる諸問題の把握を通じて、飼い主と獣医師とを媒介する VT の感情労働の現状を示す。

(2) 国家資格化されるも離職率の高い VT を対象に実施する本研究の成果を基に、超高齢社会の日本で必要とされる、より適切な終末期ケアを動物に供することが可能となり、飼い主の QOL にも資することが可能になる。

３．研究の方法

(1) 先行研究の乏しい動物看護師（VT）の終末期ケアに関する意識や諸問題に焦点を当て、研究代表者の所属する学校法人を卒業し全国の動物病院や老犬ホーム等において活躍する多世代の VT を対象に調査票調査や半構造化面接調査、参与観察を行い、ペットの終末期ケアの現状や諸問題、特にペットとの関係性が濃密な高齢飼い主とのかかわり方、そして VT の感情労働の現状を明らかにした。

(2) 調査では、安楽死を含む終末期ケアに対する賛否や処置経験、安楽死要請の受入れや提案の際の判断基準とその方法、処置前後の飼い主へのケアの有無とそれに対する飼い主の反応、処置過程で VT 自身が感じるストレス等を尋ね、得られたデータから下記を明らかにした。

① 安楽死を含む終末期ケアの経験やケア観の規定要因（宗教、勤務地域、動物看護学教育を受けた国や地域等、死生観に影響すると考えられる要因との関連性）

② 飼い主、特に高齢飼い主の終末期ケアや安楽死観との差、あるいは共通点

③ 安楽死を含む終末期ケア実施後の飼い主への対応方法とそれが飼い主に及ぼす影響の関連性

④ 終末期ケアや安楽死に関して VT が抱える葛藤や問題点

⑤ ④に関して、高齢飼い主とのかかわり方との関連性

⑥ 上記に関連する VT 業務に資する、卒前卒後教育で VT が取り上げてほしい項目

４．研究成果

データへのアクセス困難性から従来不可能であった全国の幅広い年齢層の VT への調査を行い、以下の成果を得た。

(1) 業界内で長年にわたり獣医療補助職と呼ばれ、主体的に声をあげること自体がタブー視される傾向にあることから実情把握が難しかった、VT の職場における意識やかれらの抱える問題傾向を明らかにした。

また、もう一方の当事者である飼い主との意識の差を明示した。終末期に要介護状態になるペットの自宅介護を一人で抱え込む傾向のある飼い主の心身の苦悩の深さ、それに対峙する VT に必要な死生観の知識、共感や傾聴、想像力等コミュニケーションスキルの必要性が明らかになった。

今後の研究では、これらの結果を踏まえ、獣医師、VT、飼い主間の意思疎通の齟齬の解消の実践にむけ、在学中及び卒業後の教育方法の検討を進めてゆく。

(2)　終末期ケアを語ることがタブー視される傾向にあったために、獣医療従事者自身のケアが看過される現状で、VT の抱える葛藤や感情労働などの問題点を明らかにした。

勤務年数 7 年以上のベテラン VT でも職場での死別・安楽死件数が多いとは限らなかった。死への恐怖や不安を感じる者も存在し、若手が経験不足から抱える感情労働を懸念していた。在学中及び卒後の教育プログラムにおいて、看取りの追体験の増加や具体例の多用などの工夫を増やす必要性が示された。

これらを受け、今後の研究では、VT の死生観や動物観にも配慮し、より負荷の少ない労働環境作りや、VT のニーズに即した卒前卒後教育カリキュラム項目の策定、飼い主のニーズに沿った終末期ケア実現に資するような活用方法の検討が必要である。

(3) これまで現状把握の難しかったペットの終末期ケアを巡る現場で、日本のVTが飼い主とどのようにかかわりを図っているのか、そしてVT自身がどのようなかかわり方を理想とし、必要としているのかを明示できた。さらに、飼い主とのかかわりが悪化する要因を多面的に捉え、その解決策を提示した。

またこれらの周知や普及のため、教育機関での教育プログラム策定に加え、教育機関にアクセスできない多忙な当事者に向けた、一般社会におけるアウトリーチ活動も必要であることが明らかになった。

(4) なお、本研究のテーマは飼い主に限らず広く国民の日常生活にも密接にかかわっている。ペット飼育が人の健康寿命延伸に役立つという国外での研究結果もあることから、動物愛護に深慮のうえ、飼い主が高齢でもペット飼育が継続できる社会の仕組み作りが求められていることが改めて示された。

ペットの高齢化によりペット介護が長期化・深刻化し、終末期のケアに限らず高齢飼い主による高齢ペットの「老々介護」の例や、飼い主の手に余る介護事例も増えている。そうしたニーズに応える形で増えてきた老犬老猫ホームにおいてVTが果たす役割や対峙する問題のさらなる調査分析も、人だけでなくペットも高齢化する社会において、必要不可欠であることが示された。

昨今高齢単独世帯や高齢夫婦のみ世帯が増える中、地域社会で孤立し、必要な情報や支援へのアクセスがままならぬ世帯も増している。飼育犬猫が増えすぎて動物にも人にも劣悪な環境となる、いわゆる「多頭飼育崩壊」の事例も増え、社会問題として憂慮され、環境省により審議会も立ち上げられている。

本研究の成果を基に、飼い主と最も身近なVTとが相互理解をより深めること、人間の福祉制度と必要に応じて協同し、ペットの介在により同制度を補完しつつ、飼い主の社会的孤立度を下げること、高齢飼い主をはじめ、国民の介護・死別体験の苦悩緩和に資することを引き続き目指してゆきたい。

また今回は震災の影響で調査の実現が叶わぬ地域があったが、今後災害時の喪失体験研究との連結や協同も試みたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

① 新島　典子、谷口　明子、動物看護師の死生観と感情労働の現状： 勤続7年以上のVTの経験から、動物研究、査読有、Vol.1、2019、19－31

② 新島　典子、谷口　明子、動物看護関連経験の死生観や安楽死観への影響、ヤマザキ学園大学雑誌、査読有、Vol.8、2018、15－23

③ 新島　典子、日本におけるアシスタンス・ドッグの社会受容に向けた考察―ダイバーシティ・インクルージョンの視点から、ヒトと動物の関係学会誌、査読有、Vol.47、2017、121－123

〔学会発表〕（計６件）

① Noriko NIIJIMA, A sociological approach to the reality and the reasons of “animal dislikers” in Japan, the Fourth Minding Animals Conference, January 18, 2018, Mexico

② Noriko NIIJIMA, Why diapers for dogs sell well in Japan? Research on nursing homes for elderly dogs and cats in Japan, ISAZ(International Society of Anthrozoology) 27th Annual Conference, July 3, 2018, Australia

② 新島　典子、谷口　明子、動物看護師の死生観と感情労働の現状についての考察、日本動物看護学会第27回大会、2018年10月26日（於 大宮国際動物専門学校、埼玉県）

③ 新島　典子、谷口　明子、動物看護を学ぶ学生の死生観と安楽死観、日本動物看護学会第26回大会、 2017年7月1日（於ヤマザキ学園大学、東京都）

④ Noriko NIIJIMA, The cases of industrial animals: in the lectures on “views of

life and death” at a medical and an animal related departments, 14th Triennial IAHAIO (International Association of Human-Animal Interaction Organization) international conference International Society of Anthrozoology), July, 13, 2016, France

⑤ Noriko NIIJIMA, What Do Owners Want When Their Pet Dies: A Sociological Research Study of Pet Cremation Services in Japan, ISAZ (International Society of Anthrozoology) , July 7, 2015, NY, USA

〔図書〕（計５件）

① 新島　典子、他、朝倉書店、動物の事典、2019、700（650－651）

② 谷口　明子、ファームプレス、動物看護学テキスト第2版補訂版、2019、200

③ 間曽　さちこ、新島　典子、他、文一総合出版、明るい老犬生活、2019、143(95-100)

④ Noriko NIIJIMA, 他、Palgrave Macmillan, Companion Animals in Everyday Life: Situating Human-Animal Engagement within Cultures, 2016, 313(269-282)

⑤ 新島　典子、他、朔北社、動物のいのちを考える、2015、332(107－154)

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

(1) アウトリーチ活動情報（計９件）

① 平成 30 年動物愛護週間中央行事屋内行事パネルディスカッション『人と動物の共生する社会の実現に向けて』（台東区生涯学習センターミレニアムホール、東京都）、2018 年 9 月 15 日

② 八王子学園都市大学いちょう塾公開講座「高齢者とペット―高齢者と社会をつなぐ飼育と課題」（東京都）2018 年 4 月 2 日

③ インターペット ビジネス・フォーラム 2017「人とペットの理想の共生に向けて： 社会学・死生学的視点から」（ヒューリック浅草橋、東京都）2017 年 8 月 10 日

④ 環境省主催シンポジウム『動物の愛護と管理と科学のかかわり』「道徳・倫理、生命観・動物観とのかかわり」（昭和女子大学、東京都）2017 年 2 月 23 日

⑤ 第 18 回フォスターアカデミーセミナー「犬猫との共生といのちを考える―社会学・死生学の視点から―」（東京都）2017 年 2 月 18 日

⑥ 動物愛護社会化推進協会春の公開シンポジウム「高齢者とペット」（東京大学農学部弥生講堂、東京都）2015 年 5 月 30 日

⑦ 八王子学園都市大学いちょう塾公開講座「ヒトと動物の死生学」2015 年 4 月 9 日

(2) 報道関連情報（計２３件）

① NHK 首都圏ネットワーク「犬や猫が増えすぎて…『多頭飼育崩壊』実態は」コメント放送、2019 年 5 月 17 日

② 日本経済新聞夕刊記事「老ペット人よりケア厚く」コメント掲載、2019 年 2 月 23 日

③ 読売新聞長野版記事「往診専門の動物病院」コメント掲載、2018 年 10 月 1 日

④ 読売新聞記事「ペットとどこでも一緒」コメント掲載、2018 年 9 月 11 日

⑤ 朝日新聞記事フォーラム欄「ペットロスを考える」コメント掲載、2018 年 6 月 25 日

⑥ NHK 前橋放送局「ニュースの現場」にて「高齢者の多頭飼育崩壊を未然に防ぐ取組」についてコメント、2018 年 4 月 18 日

⑦ ベネッセコーポレーション『いぬのきもち（5 月号)』「犬にやさしい社会を目指すには？」解説・監修、2018 年 4 月 10 日

⑧ 京都新聞夕刊記事「ペットロス　泣いていいよ」コメント掲載、2018 年 1 月 20 日

⑨ ベネッセコーポレーション『いぬのきもち（2 月号)』「介護から葬儀まで－最後まで『愛する』ということ。」監修、2018 年 1 月

⑩ BS11 報道ライブ IN side OUT「ペットの高齢化・2017 年問題」出演、2017 年 1 月 18 日

⑪ 週刊東洋経済 9/10 号『特集みんなペットに悩んでる』「ペットロスは怖くない」コメント掲載、2016 年 9 月 10 日

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：谷口　明子

ローマ字氏名：TANIGUCHI Akiko

所属研究機関名：ヤマザキ動物看護大学

部局名：動物看護学部

職名：教授

研究者番号（8 桁）：50389912

(2)研究協力者　　なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。